

「いいも悪いも本人の考え方次第」

佐々木 隆

シエイクスピアと言えば、誰もが一度は聞いたこと
とがあるのが、『ハムレット』の

このままでいいのだろうか、いけないだろうか、
それが問題だ。『ハムレット』第三幕第一場、小
田島雄志訳より)

という台詞だろう。この台詞は「生か死かそれが問題だ」とか「生きる、死ぬ、それが問題だ」と訳されたこともある。私は小田島訳をよく利用している。それは、原文が「To be or not to be, that is the question」と、liveとかdieという動詞を使用していないことが大きな理由だ。また、悩んでいる様子がよく表現されている。

シェイクスピアの作品には「なるほど」と思える台詞がたくさんある。私達の生活に密着した台詞に次のようなものがある。

いいも悪いも本人の考え次第。

『ハムレット』第二幕第二場、小田島雄志訳より

物事の良し悪しを決めるのは、一体どういうことなのか。例えば、給料は高いが夜遅くまで仕事があり、ほぼ毎日が家と職場の往復で終わる毎日。給料は高

いとはいえないが、仕事の時間はほぼ定時に終わり、その後は自分の時間として利用できる毎日。職場から近く住んでいるが、家賃が高く、収入を圧迫している。職場から遠く、遠距離通勤を余儀無くさせられているが、家賃は安く、周囲は自然に恵まれている。安いがすぐに壊れてしまうものを買うか、高いが長持ちするものを買うか、さて、何がいいのだろうか。

こういった問題、あるいは選択はどこかで強いられるものだ。一番悩むのは、何がいいことで、何が悪いことなのかということだろう。人にはそれぞれ価値観がある。一人一人それは違っている。とかく、人と違っていることが不安であつたりすることが多い。自分の考え方を信じ、それを貫き通そうとする強い意志が必要である。

いいは悪いで悪いはいい。『マクベス』第一幕第一場、小田島雄志訳より

価値観は何かのきっかけで逆転することもある。しかし、何がよくて何が悪いかは、人それぞれである。自分にとってそれがいいと思えても、他人から見ればそうは見えないこともある。また、その反対に自分にとってはひどいと思えることも、他人から見れば、よく見える場合もある。こうした考え方はギリシャ以来の伝統的な *carpe diem* (この日をつかめ) の精神に由来するのかもしれない。日々変化する中、絶対的なものなど存在しない。シェイクスピアはキリスト教文化圏の文化に存在しながら、あらゆるものを受け入れる体質を持っている。このようなシェイクスピアの物の考え方は、日本人にとっては受け入れやすいのではないだろうか。*carpe diem* は日本的には「日々是好日」ということになる。こうした考え方を支えるのが、「いいも悪いも本人の考え方次第」が根本となるだろう。

しかし、気をつけておくべきことがある。

人間はとかく自分流にものごとを解釈し、本来の

意味とはかけ離れたとりかたをするものだ。『ジュリアス・シーザー』第一幕第三場、小田島雄志訳より)

本来の意味とはかけ離れたとりかたも、実は「本人の考え方次第」の中のひとつかもしれない。だからこそ、どこまでも本人の考え方が重要になってくるのだ。